

『源氏物語』における源氏と醜女末摘花の恋—

井波 真弓[○](白百合女子大学), 齋藤 兆古(法政大学), 堀井 清之(白百合女子大学)Love between Genji and Ugly Lady Suetsumuhana
in “The Tale of Genji”

Mayumi INAMI, Yoshifuru SAITO and Kiyoshi HORII

ABSTRACT

The movements of the feelings of love in Suetsumuhana (The Safflower) of The tale of Genji, were examined by the discrete wavelets multi-resolution analysis. The aspects for analysis has employed following three elements of Genji: “Obsession” is the interesting and expectation of Genji to Suetsumuhana, “Disappointment” is the broken feelings of expectation and “Acceptance” is his feeling of acceptance with sympathy in spite of her ugly features and awkward manner.

As a result, it is verified that “Obsession” and “Disappointment” have gradually been emphasized showing the opposite shakes and “Acceptance” has the same tendency with “Disappointment” in the latter half. Furthermore, it has been suggested that “Obsession” of Genji would be expanding for future.

Keywords: Obsession, Disappointment, Acceptance, Multi-Resolution Analysis, Wavelet Transform

1. 緒論

本稿の目的は『源氏物語』第六帖「末摘花」における醜女末摘花に対する源氏の感情の揺れを離散値系ウェーブレット多重解像度解析を用いて検証することである。

『源氏物語』の「帚木・空蟬・夕顔」は一まとまりの作品として帚木三帖と呼ばれているが、「末摘花」も帚木三帖と同様に「中の品」の女性が続く一連の作品として第四帖「夕顔」を受けるかたちで書かれている。帚木三帖的な失敗談話の後に「雨夜の品定め」で触発された中の品の女との物語は一応ここで終わりをみる。

第六帖「末摘花」は第五帖「若紫」と同時併行しており、末摘花は、夕顔を追慕する源氏の期待を結果的に裏切る形で登場する。十八歳となる源氏は若紫、藤壺、末摘花という多面的かつ異様な愛情を求め、生涯における好きごとのクライマックス¹⁾となっている。

末摘花²⁾というのは紅花の異称であり、茎の先に付いた花を摘み取って紅を製するところから付いた名である。和歌では恋心の表れを抑えたり、恐れしたりする形で詠まれ、表に表れた恋の比喩として用いられた。しかし『源氏物語』の末摘花の姫君は実際に鼻の先が赤いところからその名で呼ばれる。

故常陸の宮の娘、末摘花は荒廃した邸にただ一人、時代に置き去りにされたようにひっそりと暮らす古風な姫君である。容

貌が醜く、極めて内向的な上、世の習慣にも疎いが故に、他の女性に比べ極端にその特徴が取り上げられ、さまざまに論じられている。鈴木日出男³⁾は神話的視点に立ち、記紀などで知られる木花之佐久夜毘売と石長比売の神話が投影されており、木花之佐久夜毘売を花のはかなさと危うさを夕顔、石長比売の堅牢さ醜さを末摘花と捉えている。また、源氏が彼女を忌避せず、その生活を援助しつつけるのも醜女なればこそその威力が彼にもたらされるから⁴⁾との説もある。さらに、滑稽譚⁵⁾としての側面からも研究されている。

源氏が末摘花に関心を持ったのは夕顔との恋が忘れられず、夕顔のような女性に再会したいとの思いからである。大輔の命婦の話から末摘花に憧れ、心の中に勝手彼女の虚像をつくり上げた。末摘花を琴の名手だと思いつみ、頭の中將とのライバル意識から恋心を駆り立てられ、控えめ過ぎた彼女の態度に心をはやらせた。やがて、源氏は末摘花の醜い容姿を目の当たりにして驚愕するが、源氏はこの不本意な結縁を悔いつつも、その醜貌と困窮に同情し、また、姫君の身を憂える故父宮の靈魂の導きにより自分は招き寄せられたのだらうとの思いから常に庇護者となり続けた。

「末摘花」において、その人物像に関する研究は多量に存在するが、源氏の感情の揺れについて可視化したものはない。そこで、本稿では夕顔のような女性に再会したいと願った源氏が期待にそぐわない醜女末摘花と出会い、どのように「妄執」と

「落胆」繰り返しながら、「受容」していったか、それぞれの要素の揺れをウェブレット多重解像度解析を用いて可視化し考察する。

2. 解析方法

2.1 解析対象

本稿ではテキストに『新編日本古典文学全集』⁶⁾を使用することとする。

源氏十八歳の春、今は亡き夕顔の可憐さが懐かしく思い起こされ、高貴な女性たちとの関係もわずらわしく感じ始めた頃、大輔の命婦から、故常陸の宮を父とする姫君、末摘花の噂を聞いた。

末摘花は宮家に生まれた高貴な姫君であったが、早くに両親と死別し、今ではすっかり没落した生活の中で、琴だけを相手にひっそりと暮らしていた。

官家の姫君、荒れ果てた邸、孤独な生活、野に埋もれた美女というロマンに胸をときめかせながら、源氏は、大輔の命婦の手引きによって、十六夜の月に誘われた一夜、こっそりと末摘花邸に忍んでゆき、彼女の琴の音を聞いて、ますます若き恋心を掻き立てられた。

しかし、その夜は自分の跡をつけてきた恋のライバル頭の中將に見つかり、源氏はしびしび、頭の中將と連れ立って帰った。

いつしか春が過ぎ、夏も去って、再び秋が廻ってきた。源氏は、八月二十日過ぎの月の明るい夜、大輔の命婦の手引きで、再び末摘花邸に忍び込み、彼女と初めて一夜をとにした。しかし、末摘花がまだ恋愛そのものに疎く、風情がなく、無口でひどく無愛想な女性であったので、胸をときめかせていた源氏は、大きく失望した。

源氏はその後も何度か末摘花邸を訪問してはいたが、かわいそうな姫君であるとは思ふものの、積極的に逢おうと思ふ心もないまま、政務にかまけて訪問を怠っていた。しかし、ある冬の雪の夜、久しぶりに末摘花邸を訪問した。

その翌朝の雪明かりの中で彼女の容貌を目の当たりにした源氏は想像をはるかに超えるほどの異常な醜貌に驚く。体型は胴長で、骨ばっており、垂れた鼻は紅花で染めたように赤かった。さらに、現代の女性とも思われぬような古風で田舎じみた服装をしていたが、豊かで長い黒髪だけは、つやつやと美しくかった。

源氏はそんな末摘花に同情して、その後も何とか世話をし、援助を惜しななかった。

年の暮れになって、末摘花は、愛する源氏のために正月用の装束をあつらえ、歌を添えて贈った。源氏はその時代遅れの装束や歌の詠みぶりに苦笑するが、彼女の気持ちを受けて、自分の方からも新年の装束を贈った。

十九歳を迎えた早春の一日、源氏は二条院で、末摘花とは対

照的に美しく聡明な紫の上を相手に、自分の鼻に紅をつけて、戯れるのであった。

2.2 キーワードの選択と方法

- 1) 作品の構成を継時的に考察するために、源氏の末摘花に対する感情の中から「妄執」、「落胆」、「受容」を要素として選び、段落ごとの使用頻度を調べた。Table 1, 2は要素を示す。
- 2) 得られたデータに離散値系ウェブレット変換の多重解像度解析を適用する。

Table 1 Selected Element.

要素	意味
第1要素 「妄執」	源氏がまだ見ぬ末摘花にいだく期待、虚像、憧れなど
第2要素 「落胆」	末摘花の現実と接した時の失望した源氏の気持ち
第3要素 「受容」	末摘花に対して落胆しつつも同情したり、状況を受け入れようとしたりする

Table 2 Examples of Element.

要素	事例
第1要素 「妄執」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 我に聞かせよ。父親王の、さやうの方にいとよしづきてもものしたまうければ、おしなべての手づかひにはあらじと思ふ。(その琴をわたしに聞かせておくれ。父宮が、そちらの方面にはじつに堪能でいらっしゃったのだから、姫君も一通りの手並みではあるまいと思うが) ・ 生ひなほりを見出でたらむ時と思されて(年が改まったのだから、ましになられたご容貌をこの目で見る事ができたら、とお思いになって)
第2要素 「落胆」	<ul style="list-style-type: none"> ・ まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。(まづ第一に、居丈が高く、背まがりにお見えになるので、ああやっぱりと、胸のつぶれる思いである) ・ さても、あさましの口つきや・・・(それにしてもなんとあきれた詠みぶりだ)
第3要素 「受容」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 我ならぬ人はまして見忍びてむや、わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべなめり(しかしながら自分以外の男が、ましてこうした縁に辛抱してゆけるだろうか。この自分がこうして姫君と交わるようになったのは、故父君が亡きあとの姫君の御身をお案じになって、姫君のおそばをお離れにならなかつた魂の導きなのだろう) ・ これこそは手づからの御事の限りなめれ、侍従こそとり直すべかめれ・・・(これこそたしかにご自身で精いっぱい詠まれたのだから。いつもは侍従が直してあげているのだろうか)

2.3 分析

「妄執」, 「落胆」, 「受容」の要素にベクトルの概念を用いる。「妄執」を基準ベクトルとして, ベクトルをグラムシュミットの方法によって全て直交化し, 重複要素を除く. さらに直交化されたベクトルを単位ノルムに正規化する. 正規化されたデータにウェーブレット多重解像度解析を適用する. 本研究では基底関数は演算処理の意味が把握できるドビッシューの2次を採用する.

2のべき乗 n の要素からなる n 次のデータベクトルを Y , ウェーブレット変換行列を W とすればウェーブレットスペクトラム S は次式で与えられる.

$$S = WY \quad (1)$$

ウェーブレット多重解像度解析は, レベル1はスペクトラムベクトル S の第1要素のみを残し他の要素をゼロとしてウェーブレット逆変換式 (2) で得られる.

$$S' = \begin{bmatrix} S_0 \\ \cdot \\ \cdot \\ S_n \end{bmatrix}, \quad D_0 = W^T \cdot S' \quad (2)$$

他のレベルも式(2)と同様にして得られる^{7),8)}.

3. 結果と考察

「末摘花」におけるウェーブレット多重解像度解析の結果を Figs. 1-4 に示す. 横軸は本作品の最初から最後まで段落ごとに構成要素を時系列に並べた. 縦軸は要素の段落ごとの頻度を表す.

「末摘花」における解析結果から, 「妄執」と「落胆」が交互に繰り返されていることから, 「妄執」が拡大されていくことが示唆された. 以下, 離散値系ウェーブレット多重解像度解析による詳細な分析結果を述べる. 横軸は段落の数を示し, 縦軸はキーワードの頻度の変化率を表す.

実際のデータ数としては48段落までであるが, 解析には2のべき乗のデータが必要であるため最後の段落に49から64段落をゼロデータとした⁸⁾. また, 結果はゼロを追加した段落を削除してある. 離散値系ウェーブレット多重解像度解析は, 全体, 半分, 1/4, 1/8, 1/16... というように段階に分けて分析し, これをレベル1, レベル2, レベル3, レベル4, レベル5... と呼ぶ. レベル1では作品全体の平均を示す. レベル2では半分に分けた1段落から16段落の平均と17段落から32段落の平均の変化を示す. レベル3では4等分した1段落から8段落の平均と9段落から16段落の平均の変化, 17段落から24段落の

平均と25段落から32段落の平均の変化である. レベル4では8等分, レベル5では16等分である.

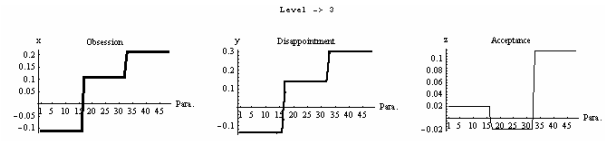


Fig.1 Level3 of the discrete wavelets multi-resolution analysis: Sentimental Patterns "Obsession", "Disappointment", "Acceptance" in *The Safflower*.

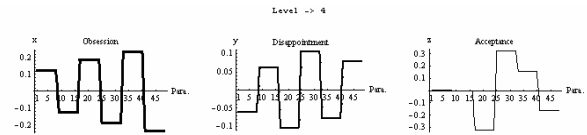


Fig.2 Level 4 of the discrete wavelets multi-resolution analysis: Sentimental Patterns "Obsession", "Disappointment", "Acceptance" in *The Safflower*.

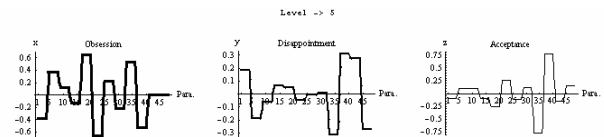


Fig.3 Level 5 of the discrete wavelets multi-resolution analysis: Sentimental Patterns "Obsession", "Disappointment", "Acceptance" in *The Safflower*.

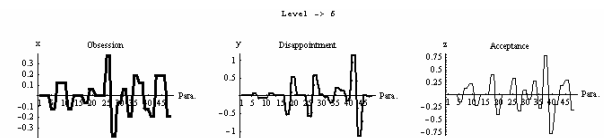


Fig.4 Level 6 of the discrete wavelets multi-resolution analysis: Sentimental Patterns "Obsession", "Disappointment", "Acceptance" in *The Safflower*.

3.1 作品の構成要素に関する解析結果

まず, 分析対象を4等分したレベル3の結果を Fig.1 に示す. 「妄執」, 「落胆」ともに前半部, 中間部, 後半部と次第に多くなっていく傾向が見られる. 「受容」は前半部, 中間部においては大きな揺れは見られないが, 後半には急激に多くなっている. 夕顔のような女性に再び会いたいと思う気持ちから, 「妄執」に拍車がかかり, 大輔の命婦の策略や頭中将への対抗心もあってまだ見ぬ末摘花に対する期待が膨らんでいく. 末摘花の現実に出会って, 彼女の性格, 詠んだ和歌や衣装への落胆はその都度増殖していく. それにもかかわらず, 少しでも変化が見られないかと期待し続け, 落胆しつつも受け入れていく.

次に分析対象を8等分したレベル4の結果 Fig.2 に示す. 「妄執」は前半部, 中間部, 後半部と次第に揺れが大きくなっていく.

った。前半部、中間部、後半部で見られる「落胆」の揺れは「妄執」の後に起こり、「落胆」と「妄執」は相反する揺れを示した。末摘花に対する憧れは髪的美しさ以外はことごとく裏切られている。「受容」は中間部に大きな揺れが見られ、後半部では「妄執」と連動する傾向が見られた。

Fig.3は分析対象を16等分したレベル5の結果である。「妄執」は前半部、中間部、後半部を通じて常に大きい揺れが見られる。「落胆」は前半部の初めと後半部に揺れが見られるが、源氏が末摘花の容貌を目の当たりにする箇所特に大きな揺れが見られる。「受容」は後半部の揺れが大きい。

最後に分析対象を32等分したレベル6の結果をFig.4に示す。「妄執」は中間部から後半部に大きな揺れが見られる。末摘花への「妄執」は実際に姫に会ってからのほうが大きく揺れる。

「落胆」は前半部、中間部、後半部と次第に揺れが大きくなって「落胆」はするものの「妄執」が止むことがなく、さらなる「落胆」を経験する。「受容」は前半部、中間部、後半部と揺れを繰り返すが、後半部の揺れが大きい。

4. 結論

- (1) 「妄執」は常に揺れが見られるが、前半部より後半部にかけての揺れが大きい。
- (2) 「落胆」の揺れも「妄執」と同様に後半部にかけて次第に揺れが大きくなる傾向があるが、「落胆」は「妄執」の後に起こり、「妄執」とは相反する揺れを示した。現実接して「落胆」しても「妄執」が止むことがなかった。現実を直視するよりも「妄執」を追い求める気持ちのほうが強い傾向があった。
- (3) 「受容」は後半部に大きな揺れがみられ「落胆」と連動する傾向が見られた。恋における「受容」とは相手の負の面をも含めた全人格を受け入れることが示された。
- (4) 「妄執」と「落胆」が繰り返されながらも、「妄執」が止むことなく増大していることから、源氏が今後も女性遍歴を続けていくことが示唆された。
- (5) 「妄執」と「落胆」を繰り返しながらも、女性を「受容」していく源氏の人間としての魅力の一端が明らかとなった。

参考文献

- 1) 重松信弘：源氏物語研究叢書III 源氏物語の主題と構造、風間書房（1981）pp. 212-229.
- 2) 久保田淳 馬場あき子：歌ことは歌枕大辞典、角川書店（1999）p. 471.
- 3) 鈴木日出男「夕顔と末摘花——『源氏物語』の古代構造についての断章——」季刊 文学 春号、岩波書店（1991）p. 139-151.
- 4) 壺内美佳：末摘花論—その“山の神”的性格、大谷女子大学国文、大谷女子大学国文学会、19、（1989）pp. 54-59.
- 5) 野村精一：源氏物語の創造、桜楓社（1969）p. 100.
- 6) 阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男 校注・訳：新編日本古典文学全集20 源氏物語①、小学館（1994）pp. 265-307.

- 7) 齋藤兆古：ウェーブレット変換の基礎と応用—Mathematica で学ぶ、朝倉書店（1998）p. 39, pp. 93-95.
- 8) 堀井清之、齋藤兆古：特許「文学作品解析方法および解析装置」、特願JP10-102673A.